

## サウジアラビアで皇太子交代



(一財) 日本エネルギー経済研究所 中東研究センター 研究理事 保坂 修司

### はじめに

サウジアラビアでは今年1月、アブダッラー国王崩御にともない、サルマーン皇太子が新国王として即位、そして異母弟のムグリン副皇太子が皇太子に、同腹の兄、故ナーイフ元皇太子の息子であるムハンマド・ビン・ナーイフ内相が副皇太子に任命されていた。また、新国王はほかにも大規模な人事異動を実施したが、それは、亡くなったアブダッラー国王の影響力を排除するためといった分析も流れるほど、大胆、かつ迅速なものであった。

サルマーン国王の進めた大胆人事についてはすでにさまざまな憶測が流れており、本誌でも詳細な分析が行われていた [辻上, 2015a] [辻上, 2015b] [Halper and Associates, 2015]。

ところが、その新人事の評価が定まる前の4月29日、サルマーン国王は、就任してわずか3ヵ月で突然、ムグリン皇太子を解任、代わりにムハンマド副皇太子を皇太子に昇格させる勅令を発布したのである。国王はまた、新たな副皇太子には実の息子ムハンマド国防相を任命した。それとともに、ムグリンが保持していた第1副首相の地位もムハンマド新皇太子が引継ぎ、あわせてムハンマド新副皇太子が第2副首相となった。なお、新皇太子は内相、新副皇太子は国防相の地位はそのまま維持している。これによってサウジアラビアの次の国王はムグリンからムハンマド・ビン・ナーイフへと代わり、その次がムハンマド・ビン・サルマーンになるという新しい既定路線ができあがったのである。

この突然の皇太子解任人事が果たしてサウジアラビアにとって何を意味するのか、また、それが今後のサウジの内外政にどのような影響を及ぼすのか、さらにサウジアラビアの対日政策に何らかの変化がみられるのか、いくつか焦点をしばって、考えてみたい。

### 解任の背景

サウジアラビアにおいて王位継承に関わる法律は多くない。たとえば、サウジアラビアの事実上の憲法<sup>(1)</sup>ともいえる統治基本法では、統治権は初代国王のアブドゥルアジーズの子

(1) 統治基本法第1章第1条では、サウジアラビアの憲法はクルアーンとスンナであると規定されている。

ども、そして孫<sup>(2)</sup>へと受け継がれ、もっとも「高潔な人物」がそれを担うと規定されている。

一方、第5条にはもともと「国王は勅令によって皇太子を選任し、また解任する」という条文があった<sup>(3)</sup>。本来であれば、今回の皇太子解任もこの条文にもとづき実施されたはずであったが、実はこの条文は、アブダッラー

前国王時代の2006年に忠誠の誓い委員会法が制定されたときに、「国王への忠誠の誓い、および皇太子の選出の呼びかけは、忠誠の誓い委員会法にもとづき行われる」と修正されていた(忠誠の誓い委員会法前文第2項)。つまり、もともとあった国王による皇太子解任の法的根拠は、この段階でなくなっていたということになる。

筆者は、国王による皇太子解任に関わる規定が他にあるかどうか、寡聞にして知らないが、皇太子指名に関しては、前述の忠誠の誓い委員会法にいくつか関連する条文を見つけることができる<sup>(4)</sup>。同法によれば、国王が崩御すると、忠誠の誓い委員会が招集され、皇太子に対し忠誠を誓い、これによって皇太子は正式に国王に即位する。ついで、新国王は、同委員会メンバーと協議のうえ、3人以下の皇太子候補を委員会に提案し、委員会はもっともふさわしい人物に忠誠を誓い、それで新皇太子が選出される、という手順である(第7条A項)。

今回の皇太子交代がどのような手順で行われたのか正確にはわからない。皇太子交代に関する勅令の前文には、ムグリン自身が皇太子から解任してほしいとの書簡を書いていたことが言及されており、それを受けての決定ということが示唆されている。しかし、書簡の日付は勅令発布の日と同じであり、勅令が発表されたのがサウジ時間の朝であることから考えても、書簡が届いてから、皇太子解任を含む大規模な人事異動を決定したとは考えづらい。事前に決定していたとみるべきだろう。

ムグリン前皇太子は若いころから有能だとの評判が高かったが、母親がイエメン系側室であったことから、国王候補にはなれないともいわれていた<sup>(5)</sup>。しかし、2014年に副皇太

---

#### 筆者紹介

慶應義塾大学大学院修士課程修了。在クウェート日本大使館・在サウジアラビア日本大使館専門調査員、中東調査会研究員、近畿大学教授等を経て現職。主な著書に『乞食とイスラーム』(筑摩書房)、『サウジアラビア』(岩波新書)、『オサマ・ビンラディンの生涯と聖戦』(朝日新聞出版社)、『イラク戦争と激動する中東世界』(山川出版社)等。

---

- 
- (2) ただしくは「子どもたちの子どもたち」となっている(統治基本法第5項)。したがって、逐語的にみれば、第3世代以降、つまりアブドゥルアジーズ初代国王の孫の世代だけにまで適応されるものであり、厳密にいうと、王位が第4世代に移るまでに、条文の修正が必要になるかもしれない。
  - (3) 統治基本法ができたとき、この条文は当時のファハド国王がアブダッラー皇太子を解任するための布石ではないかとの噂が流れた。
  - (4) 忠誠の誓い委員会法で具体的に皇太子解任に言及しているのは、皇太子が病気で執務遂行が不可能になった場合についてだけである。
  - (5) 国王の母親(つまり、第2世代の場合、アブドゥルアジーズ初代国王の妻)はナジュド出身者でなければならないという不文律があるという説が広く流布しているが、実際には母親が非ナジュド出身者であっても、有力な国王候補をみなされていたケースは、ムグリン以外にも存在する。

子に任命されたことで、アブダッラー国王、サルマーン皇太子につぐ事実上ナンバー・スリーの地位についた。ただし、たとえ、そうであっても、その出自から国王になれないとの観測がいくつもの媒体でとりあげられていた。

実際、ムグリンが副皇太子に指名されたとき、忠誠の誓い委員会は彼に忠誠を誓ったのだが、それは満場一致ではなかったのである。彼を副皇太子に任命した2014年3月の勅令にはわざわざ「忠誠の誓い委員会メンバーの4分の3を超える圧倒的多数で支持された」と言及されており、一定数の反対があったことがわかる（1435年5月26日勅令86a号）。

副皇太子・皇太子指名後もムグリンの国政における役割はむしろ縮小しているようにもみえた。ムグリンには、皇太子として事実上、権力基盤となるべき機関がないので、若い甥である両ムハンマドの活躍がどんどん目立つようになっていくのとうらはらに、メディアにおける彼のプレゼンスは少なくなっていた。とくに若い2人がテロ組織、イスラーム国やイエメン情勢など、サウジアラビアにとってきわめて重要な問題をハンドリングしているのに対し、ムグリンは外国要人との謁見など、地味な役割に終始していたのである。したがって、皇太子指名後も、ムグリンがいずれ解任されるのではないかとの噂はサウジ・ウォッチャーのあいだで消えることがなかった。したがって、今回の解任はある程度織り込み済みだったといえるだろう。だが、それにしても指名後わずか3ヵ月でのスピード解任は予想外であった。

今回のムグリン皇太子解任人事で興味深いのは、少なくともサウジアラビアからの報道でみるかぎり、解任の理由についてほとんど触れられていないことである。サルマーン国王の解任勅令では「(ムグリン) みずからの要請にしたがって」とあるが、これは、サウジアラビアで、懲戒的な人事異動がある場合の常套句であり、かならずしも実態を反映したものではない。とくに王族の場合、年長の王子が年少の王子に置き換えられるときなど、しばしば、こうした表現が用いられる。その場合、懲戒というよりも、本人の意志とは別に、上からのお達しで辞職してもらおうといったケースも多い<sup>(6)</sup>。

ちなみに勅令の前文には、ムグリンのほうから自分を解任してほしいと要請する書簡を書いていたことが言及されており、それを受けての決定ということが示唆されている。しかし、書簡の日付は勅令発布の日と同じであり、勅令が発表されたのがサウジ時間の朝であることから考えても、書簡が届いてから、このような大規模な人事異動を決定したとは考えづらい。おそらく事前に決定していたとみるべきだろう。

なお、ムグリン解任後の処遇については、サウジアラビア公的メディアは何も伝えていない。これまでの例では、解任された高官はしばしば国王顧問といった名誉職のような肩

---

(6) たとえば、サルマーンの実弟で、ナーイフ皇太子兼内相没後、内相に任命されていたアフマドは「みずからの要請にしたがって内相を解任され」、代わって甥のムハンマドが内相に任命されている（現在ムハンマドは皇太子兼内相）。

書きを与えられことも多かったが、ムグリンについてはそれもない。

ただ、解任後もムグリンはサウジアラビアのメディアにはときおり登場しており、そこからみても、少なくとも現時点では、今回の解任が懲戒人事であったことを示す証拠はみつかっていない。たとえば、サウジアラビアのメディアでは、ムグリンはムハンマド・ビン・ナーフ新皇太子、およびムハンマド・ビン・サルマーン新副皇太子への忠誠の誓いを率先して行っている。もちろん、これはサウジアラビアの体制側報道であり、そのまま鵜呑みにはできない。だが、一連の動きのなかで、ムグリンの息子、マンスールが国王顧問（閣僚級）に任命されているのは示唆的であろう。これによって、ムグリン家のあいだに残るであろう不満やわだかまりを抑制する意味があると考えられるからだ。また、もうひとりの息子、ファハドも両ムハンマドに対し祝辞を述べたと報じられており、こうした対応には、今回の劇的な人事異動でも、サウード家内には対立がないことを示す意図があると思われる。ムグリンの解任に対する、国王や皇太子・副皇太子側からの補償的措置を考えれば、ムグリンの子どもたちが今後、政府内で重要な役割を与えられる可能性も否定できないだろう。

## その他の見かた

もちろん、今回の解任劇を外交や内政をめぐるサウード家内部の対立で説明しようという見かたは、非サウジ・メディアを中心に活発になっている。たとえば、イエメン問題である。現在、サウジアラビアはイエメンのザイド派武装勢力、フーシー派に対する軍事攻撃を継続中だが、人事面で緊迫性があるとすれば、対イエメン政策をめぐって何らかの路線対立が顕在化したことも十分考えられる。サウジアラビアでは、伝統的にイエメン外交を担うのは国防省とされており、うがった見かたをすれば、イエメン人を母にもつムグリンと実際に国防省を掌握するムハンマド国防相（副皇太子）が軍事作戦をめぐって対立していた可能性も指摘できる。

もうひとつの要因はサルマーン国王の年齢である。同国王も正確な年齢は不明だが、いずれにせよ80歳前後と高齢であり、また体調面でも病気説がしばしば報道されている。サルマーン国王が、体調が深刻化しない段階で、最愛の息子であるムハンマドへの王位継承の道筋を担保しておこうとしたのではという憶測も漏れ伝えられている。

ムハンマド新皇太子には後継者となる息子がいないため、ナーフ元皇太子の系統からサルマーン元国王の系統に王位を戻すことへの障害は大きくない。あいだにムグリンが入った場合、前述のとおり、ムグリンには息子が存在することから、今回のように実の息子への継承を考えはじめないともいえない。そのことから、事前にその芽を摘んだといった説明も可能である。

もちろん、そのつもりであれば、1月のアブダッラー前国王崩御のときに、ムグリンを

飛ばして、両ムハンマドを皇太子・副皇太子につけることも可能であったろう。なぜそうしなかったのか。さすがにアブダッラー国王崩御のときに、同国王お気に入りであったムグリンを解任することはむずかしかったのか。あるいは、即位して3ヵ月のあいだに、最愛の息子を思う親心が昂進したのか。どの説も今のところ決め手に欠き、説得力があるとはいいがたい。

いずれにせよ、ムグリンが王位継承ラインから外れたことによって、サルマーン現国王の次は初代国王の孫の世代（第3世代）に王位が移ることになる。閣僚のなかにも首相である国王を除けば、サウード家出身者は全員、第3世代になっている。すでに州知事はしばらく前から第3世代以降に入れ替わっており、いよいよ第3世代、あるいはその下の世代が政治や経済等社会のあらゆる分野で前面に出てきたといえる。

### ムハンマド新副皇太子

ムグリンを継いだムハンマド新皇太子は、もともと副皇太子というナンバー3のポジションにあったので、ムグリンが解任されれば、その後任として皇太子に選ばれるのは当然であろう。また、前評判からも、彼が皇太子になることにはほとんど異論は出ていなかった。

一方、従弟のムハンマド新副皇太子は、アブダッラー前国王崩御に際し、国防相という要職に任命された。そこから、突然、将来の国王有力候補と目されることになったので、手腕等は未知数である。もちろん、彼は以前からサルマーン国王の最愛の息子として知られており、その意味ではこちらも順当な人事ということになる。しかし、新副皇太子は同じ第3世代のなかでも年齢は下のほうに属しており、年長の兄弟や従兄弟たちとの関係が微妙になる可能性も否定できない。

ちなみに、ムハンマド副皇太子の生年については1980年と1985年の2説が流布している。英語メディアでは1980年生まれ説が一般的であったが、アラビア語メディアでは1985年とするものが多かった。もし、後者が正しいとすると、ムハンマド副皇太子は現在29歳か30歳という若さということになる<sup>(7)</sup>。

サルマーン国王には知られているかぎり12人の息子がいる。母親別にいうと、上からファハド、スルターン、アフマド、アブドゥルアジーズ、フェイサル、そしてムハンマド、トゥルキー、ハーリド、ナーイフ、バンドル、ラーカーン、さらにサウードの12人である。このうちファハドからフェイサルまではスルターナ・ビント・トゥルキー・スデイリーを母とし、ムハンマドからラーカーンまでがファフダ・ビント・ファラーフ・アールヒスレイン・アジュミー、最後のサウードがサーラ・ビント・フェイサル・アブーイスネイン・

---

(7) 一般には1985年8月31日説が強い。

スベイーをそれぞれ母としている。

スルターナは、名前でもわかるとおり、サルマーン国王の母親と同じ有力家系であるステイリー家の出身であり、その息子たちはいずれも欧米経験が豊富である。長兄のファハドは東部州副知事をつとめたが、その後、死亡している。次男のスルターン（1956年生まれ）はアラブ人・ムスリムで最初の宇宙飛行士として知られ、現在は王立観光遺跡総合委員会の委員長（事実上の観光相）をつとめる。三男のアフマドはアラブ世界を代表する日刊紙シャルクルアウサトなどを抱えるSaudi Research and Marketing Group（SRMG）会長をつとめていたが、やはり早くに亡くなっている。SRMG会長職は一時五男のフェイサル（1970年生まれ）がついでいたが、彼は現在、マディーナ州知事の要職にある。フェイサルはオックスフォード大学で博士号を取得したことで知られ、SRMGの会長になるまえは、サウード国王大学の教授でもあった<sup>(8)</sup>。四男のアブドゥルアジーズ（1960年生まれ）は日本でもおなじみであろう。東部州にある名門ファハド国王石油鉱物資源大学で修士号を取得したのち、長らく石油畑を歩み、現在は副石油相に就任している。

一方、ムハンマド新副皇太子は兄たちとは対照的な経歴をもつ。兄たちの母が定住民やオアシス住民の典型であるステイリー家の出であるのに対し、彼の母の出自は、より遊牧的・部族的背景を色濃くもつアジュマーン族のヒスレイン家である。風貌も、兄たちと比較して、立派な体躯、精悍な顔立ちなど、ムハンマドがもっとも父、そして初代国王アブドゥルアジーズに近いように思う。それが、彼が国王の最愛の息子だとみなされる、いわれかもしれない。

彼は一部には粗野だとの評判が出ているようだが、これは逆にいえば、部族的価値観の体現でもあり、同じ価値観を共有するものからみれば、逆に人気が出る要因となるであろう。

また、それと同じ視点からみることができるとは思えないが、異腹の兄たちと違って、欧米への留学経験がないのは興味深い。欧米留学は、サウード家の第3世代王族のなかではある意味、常識のようになっていたが、それが無いというのはきわめてめずらしい。そのためかどうか、彼は国際的に活躍する兄たちと比べて、きわめて国内的であるという評価が一般的である。筆者は、数年前だが何度かムハンマド副皇太子とお会いする機会があったが、英語もほとんどしゃべらず、また、少なくとも筆者と話していたときは、アラビア語もナジュド訛りを強く感じた（ただし、副皇太子の名誉のために、粗野な感じはまったく受けなかったことはつけ加えておこう）。

とはいえ、国防相という欧米との関係も重要になってくる地位にあるだけに、ドメステ

---

(8) 博士論文はサウジ・イラン関係。これは下記のようなかたちで出版されている。*Iran, Saudi Arabia and the Gulf: Power Politics in Transition 1968-1971*. I. B. Tauris & Company

イックな彼がうまくハンドリングできるかどうか。そのあたりが彼の将来を見通すうえでのひとつの重要なカギになるのではないだろうか。

## 王宮府長官

なお、4月末の新しい人事ではムハンマド新副皇太子が兼務していた王宮府長官のポジションにハマド・スワイレムが就くことになった。王宮府長官の地位は、1月にアブダッラー国王が崩御した際、長年、同国王と二人三脚で政策を進めてきたハーリド・トワイジェリーから、ムハンマド・ビン・サルマーンに移ったばかりであった。王宮府長官という地位は、国王にもっとも近い地位であり、サウジアラビアでは並の閣僚以上に重要で、しばしば「民間人の首相」とも称される。

ハーリドの父、アブドゥルアジーズ・トワイジェリーはアブダッラー国王が若いころから多年、側近としてつかえ、皇太子時代には皇太子府長官になっていた。2005年以降、息子のハーリドが跡をつぎ、その権力の強大さは、しばしばアッバース朝時代に歴代カリフを支えたバルマク家にも比されるほどであった。そのせいかどうか、一部王族のあいだでは批判の対象になっていた。アブダッラー前国王の、ときに独善的ともいわれた「リベラル」路線は、とりわけ王族内の保守派や宗教界には評判が悪かったのだが、それを牽引していたのが実は、ハーリド・トワイジェリーだとの説も根強かった。しかし、1月の人事でトワイジェリー家の影響力は事実上、消滅したことになる。サルマーン時代の政策の変化をみるうえで王宮府の新体制の役割は重要になってくるだろう（トワイジェリーについては[辻上, 2015a, ページ:70]も参照）。

4月の人事異動でムハンマド副皇太子は、副皇太子に任命されるかわりに、1月以降保持していた王宮府長官の職を解任され、代わりに民間人のハマド・スワイレムが長官に任命された。ムハンマド副皇太子は国防相としてサウジアラビアを中心とするイエメンのフーシー派攻撃（決意の嵐作戦）を陣頭指揮しており、王宮府の仕事をこなす余裕はなくなってしまったのだろう。ムハンマドがより緊迫したイエメン対策に集中できるようにするための措置といえる。

スワイレム新王宮府長官はもともと皇太子府で副長官として当時のサルマーン皇太子、ムグリン皇太子につかえていたが、1月の人事異動で皇太子府長官に昇格していた。その意味ではサルマーンの子飼いと見えるかもしれない。だが、さらに重要なのは、4月の人事異動にともない、皇太子府が王宮府に併合されたことである。これによって、スワイレムはサルマーン国王のみならず、ムハンマド皇太子、ムハンマド副皇太子と公私にわたってもっとも近い関係を構築できる地位についたことになり、かつてのトワイジェリー家以上の強大な権力をもつ可能性すら出てきた。すでに反サウジ的なメディアでは、スワイレムが国王の秘密の金庫番として暗躍するなどの報道もみられるようになっている。

## 副皇太子の評判

ムグリン皇太子のまさかの解任をみてしまうと、サルマーン国王からムハンマド皇太子、さらに彼からムハンマド副皇太子へと、順調に王位が継承されるかどうか確証がもてなくなってきた。ムハンマド皇太子については、これまでサウジアラビアの対テロ戦争をひっぱってきた実績もあり、彼の即位に反対する声はほとんど聞かれない。

しかし、ムハンマド副皇太子についてはそうではない。実際、ムハンマド副皇太子が副皇太子に指名されたとき、忠誠の誓い委員会メンバー34人のうち4人が反対し、2人が保留していたのである。サウジアラビアのメディアでは誰が反対したのか、また反対の理由などは明らかになっていないが、わざわざ反対があったと指摘していることも含めて、さまざまな憶測を呼んでいる。もちろん、非サウジ・メディアでは反対した忠誠の誓い委員会メンバーの名前が挙げられているが、信用できるものではない。今のところメンバー本人で反対を公言しているのはタラールだけだと思う（ただし、投資家として有名な息子のワリードはTwitterで2人に忠誠を誓うと述べている）。反対した王子たちとして、たとえばインターネット上で名前が挙がっているのは、バンダル（代理はフェイサル）、アブドゥッラフマーン、ムトイブ、タラール、マムドゥーフ、アブドゥルイラーフ<sup>(9)</sup>、あるいはアフマド、アブドゥッラフマーン、タラール、トゥルキー、アブドゥルイラーフ、マムドゥーフ<sup>(10)</sup>などである。この名前に信憑性があるかどうかといえ、まったくないといわざるをえない。ただ、仮に事実、あるいは部分的にでも事実があるとするなら、ここに名前の挙げた人物が全員、第2世代に属しているのは（ただし、1人は代理出席の第3世代）、いかにもという感じがするだろう。また、アブドゥッラフマーンやアフマド、トゥルキーといった、サルマーン国王と同じ、いわゆるファハド一族（ステイリー・セブン）に属する王子までもが含まれている点も同様である。

当然、ムハンマド副皇太子には、若すぎるとか、経験不足とかいろいろ疑問符はつくだろう。ちなみに、オンライン紙のイーラーフによると、ムハンマドはサウジアラビア全体でトップ10に入る優秀な成績で高校を卒業、サウード国王大学法学部で法律と政治学を学んだそうである。大学での成績も学年2位という好成績だったそう<sup>(11)</sup>。

卒業後はまず慈善活動に精を出し、多数の慈善組織、社会活動グループを設立する。そのなかで中核になっているのが、みずから創設者であり、会長でもあるムハンマド・ビン・サルマーン・ビン・アブドゥルアジーズ王子慈善ファウンデーション（Misk Foundation）である。

---

(9) <https://www.watan.com/reports/5906-هؤلاء-هم-الأمرء-الستة-الذين-رفضوا-مبايعة-المحمديين.html> (2015年6月1日閲覧)

(10) <http://rassd.com/140297.htm> (2015年6月1日閲覧)

(11) <http://elaph.com/Web/News/2015/4/1003736.htm> (2015年6月1日閲覧)



政治活動としては2007年に内閣専門家会議の無任所顧問に抜擢されている。彼が1985年生まれだとすると、22歳、つまり大学を卒業後、すぐにこうした要職についたわけだ。その後、2009年にはリヤード州知事（当時はサルマーン国王が知事であった）の特別顧問となり、さらに父が皇太子になると、2013年、皇太子府長官、皇太子特別顧問となった（閣僚級）。当時、父のサルマーンは国防相を兼任していたので、ムハンマドも国防相室総監として国防省での経験をつむことになる。翌年には国務相に任命され、内閣の一員となった。そして、2015年1月には国防相兼王宮府長官、そして4月には副皇太子兼国防相に任命されたのである。

1月以降の人事異動にともない、大きな行政制度の変化もあった。多数あった政府の会議が、政治安全保障会議と経済開発会議の2つに収斂されたのである。そして、前者はムハンマド副皇太子（当時）兼内相、後者はムハンマド国防相にゆだねられた。政治はムハンマド現皇太子、経済は現副皇太子という棲みわけであるが、政治安全保障会議にはムハンマド副皇太子がメンバーとして名を連ねているのに対し、経済開発会議ではムハンマド皇太子はメンバーになっていないのである。つまり、ムハンマド副皇太子のほうが政治から経済まで幅広い分野をカバーしているわけだ。

しかも、4月29日には、サウジ・アラムコが、解体された最高石油会議に代わって、サウジ・アラムコ最高評議会の設立を明らかにし、その議長にムハンマド副皇太子をつけたと発表したのである<sup>(12)</sup>。このアラムコ最高評議会の役割はいぜん不鮮明だが、アラムコの声明や報道によれば、アラムコと石油省を切り離すことが目的だという。重要なのはこれがムハンマド副皇太子のイニシアティブとされている点だ。アラムコでどのような機構改革が実施されるのかはわからないが、サウジアラビアの石油政策の最高責任者が若いムハンマドになったことはまちがいないだろう。

筆者は寡聞にして、ムハンマド副皇太子が石油政策に携わった経験があったかどうかすら知らないが、国際社会にとっても重大な責任を負うアラムコを若い王子がどうハンドリングしていくのかは大いに注目を集めるところであろう。

なお、石油相人事は今のところナイミー石油相の留任で変更はない。だが、一部のメディアでは、アブドゥルアジーズ副石油相が石油相に昇格するのではないかと報じられている。前述のように、アブドゥルアジーズ副石油相はサルマーン国王の息子であり、ムハンマド副皇太子の兄にあたる。しかも、長く石油畑を歩んできた石油の専門家である。たとえ、大臣になったとしても、25歳も年の離れた、息子のような年齢の弟が上司になるというのも、なかなかやりにくいのではないだろうか。もちろん、それは弟のほうでも同

---

(12) <http://www.saudiamco.com/en/home/news-media/news/BoardEndorses.html>（2015年6月1日閲覧）

じであろう。石油政策というきわめて結果のわかりやすい責務を、昨年来の油価低下という困難な時代に、はたしてきちんとなせるかどうか。場合によっては、サウード家内部だけでなく、一般国民のあいだからも突き上げを食う可能性がある。

加えるに、ムハンマド副皇太子はイエメン問題の担当者であり、対フーシー派の軍事攻撃「決意の嵐」作戦の最高責任者である。このきわめてむずかしい情勢においてイエメン問題で対応を誤るようなことがあれば、こちらもやはり一気に不満が噴出する可能性があるだろう。

## おわりに——日本とのかかわり

ムハンマド副皇太子は同じサウード家メンバーで、叔父にあたるマシュフル王子の娘、サーラと2008年に結婚している（筆者が知っている結婚はこれ一度だけ）。新婚旅行には日本を訪問しているほか、サルマーン国王が皇太子時代に訪日した際にも同行している。また、それ以外にも何度もお忍びで日本を訪れているといわれており、相当な親日家と考えていいだろう。さらに日本のアニメ・ファンとしても知られており、そのアニメに関する造詣の深さには筆者自身、たいへん驚かされた記憶がある（もちろん、筆者のアニメに関する知識は貧弱なのでそう感じただけなのかもしれないが）。

ムハンマド皇太子も日本に対しては親近感をもっているとの情報もあり、その意味で対日関係は順調に推移するのではないだろうか。今年には日本とサウジアラビアの国交樹立60周年でもあり、サウジアラビアの新指導部の訪日をせつに期待したい。

## 【参考文献】

### 文献目録

Bligh, Alexander. (1984). *From Prince to King : Royal Succession in the House of Saud in the Twentieth Century*. New York : New York University Press.

Davidson, Christopher M. (2012). *After the Sheikhs : The Coming Collapse of the Gulf Monarchies*. London : C. Hurst & Co.

Halper and Associates. (2015年2/3月). サウジアラビア王室の王位継承と改革. 中東協力センターニュース.

Henderson, Simon. (1994). *After King Fahd : Succession in Saudi Arabia*. Washington, D.C. : The Washington Institute for Near East Policy.

Henderson, Simon. (2013). *Who Will be the Next King of Saudi Arabia?* Washington, D.C. : The Washington Institute for Near East Policy.

Henderson, Simon. (2015a). *Riyadh Reshuffle*. Washington, D.C. : The Washington Institute for Near East Policy.

- Henderson, Simon. (2015b). Shift in Saudi Oil Leadership. Washington, D.C.:The Washington Institute for Near East Policy.
- Holden, David, Johns, Richard. (1982). The House of Saud. London : Pan Books Ltd.
- Jordan, Robert, Henderson, Simon. (2009). Who Will be the Next King of Saudi Arabia...And Does It Matter? Washington, D.C. : The Washington Institute for Near East Policy.
- Kechichian, Joseph A. (2001). Succession in Saudi Arabia. New York : Palgrave.
- Kostiner, Joseph (編). (2000). Middle East Monarchies : The Challenge of Modernity. Boulder : Lynne Rienner Publishers.
- Lacey, Robert. (1982). The Kingdom. Fontana/Collins.
- Lees, Brian. (1980). A Handbook of the Al Sa'ud Ruling Family of Saudi Arabia. London : Royal Genealogies.
- Powell, William. (1982). Saudi Arabia and Its Royal Family. Secaucus:Lyle Stuart Inc.
- Sabri, Sharaf. (2001). The House of Saud in Commerce : A Study of Royal Entrepreneurship in Saudi Arabia. New Delhi : I.S. Publications Pvt. Ltd.
- Saudi Royal Wealth : Where Do They Get All That Money? (日付不明). 参照日 : 2014年2月4日, 参照先 : Wikileaks : <http://wikileaks.org/cable/1996/11/96riyadh4784.html>
- Stenslie, Stig. (2012). Regime Stability in Saudi Arabia : The Challenge of Succession. London : Routledge.
- Winter, Lucas. (2013). Mapping Saudi Arabi's Succession. Fort Leavenworth, Kansas : The Foreign Military Studies Office.
- 辻上奈美江. (2015b/4). イエメン攻撃に見るサルマン新体制. 中東協力センターニュース.
- 辻上奈美江. (2015a/2-3). サルマン新国王の誕生とサウジアラビア情勢変動の予兆. 中東協力センターニュース.
- 保坂修司. (2001). サウジアラビアの王位継承問題. 現代中東研究, 4 (4), 1-28.

\*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり, 中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。